

1. 友達とかかわり合いながら創る生活

－「自分づくりのプロセス」を見つめて－

教諭 中田 幸江

全国附属学校連盟幼稚園部会 鹿児島大会
全体会提案「協同して遊ぶことに関する指導のあり方」

1. はじめに

幼稚園教育要領解説によると「幼児らが互いにかかわりを深め、協同して遊ぶようになるためには、まず幼児一人一人の自発性を育てることが基盤となる。この自発性とは教師や友達とのかかわりの中で獲得されていくものである」と述べられている。これは平成7年度から平成14年度までの本園の研究を通して得られた結論と同じだと考えている。

私達は平成7年から3年間「自分らしさ」をテーマに、幼児が自分らしさを出しながら生きようとするプロセスを大切に研究を進めてきた。この研究を通して、幼児らが友達や教師とかかわり合いながら切磋琢磨してよりよく生きようとする姿が見えてきた。そして、「自分らしさ」とは友達や教師とのかかわりを通してこそ磨かれるものであるという結論に至り、その過程を「自分づくり」とした。

平成10年から4年間は「自分づくり」と「友達とかかわり合う」ということを踏まえ、「友達とかかわり合いながら創る生活」をテーマに掲げて教育課程の編成を行った。本園の現教育課程では3歳児「教師とかかわりながら自分が創る自分の生活」、4歳児「教師や友達とかかわりながら自分が創る自分達の生活」、5歳児「友達や教師とかかわり合いながら自分達が創る自分達の生活」と各年齢の目標を設定し、日々の保育を展開している。

2. サブテーマ「自分づくりのプロセスを見つめて」について

これまでの研究を踏まえ、本園では協同して遊ぶようになるためには、「幼児が友達をも巻き込みながら互いに揺さぶり合い、自分づくりをしていく過程において友達と共通の目的を見いだしていくこと」が大切であると考えている。しかし、そのためにどのような環境の構成や教師の援助が必要かということについては十分な成果を出していない。そこで、「自分づくりのプロセス」を軸とし、協同して遊ぶようになるためには、どのような環境の構成や教師の援助が必要かを探っていくことにした。

3. 研究の目的

- ・幼児が友達や教師とかかわり合いながら変容していく姿をとらえる。
- ・幼児らのかかわり合いを促す環境の構成、教師の援助を探る。

4. 研究の方法

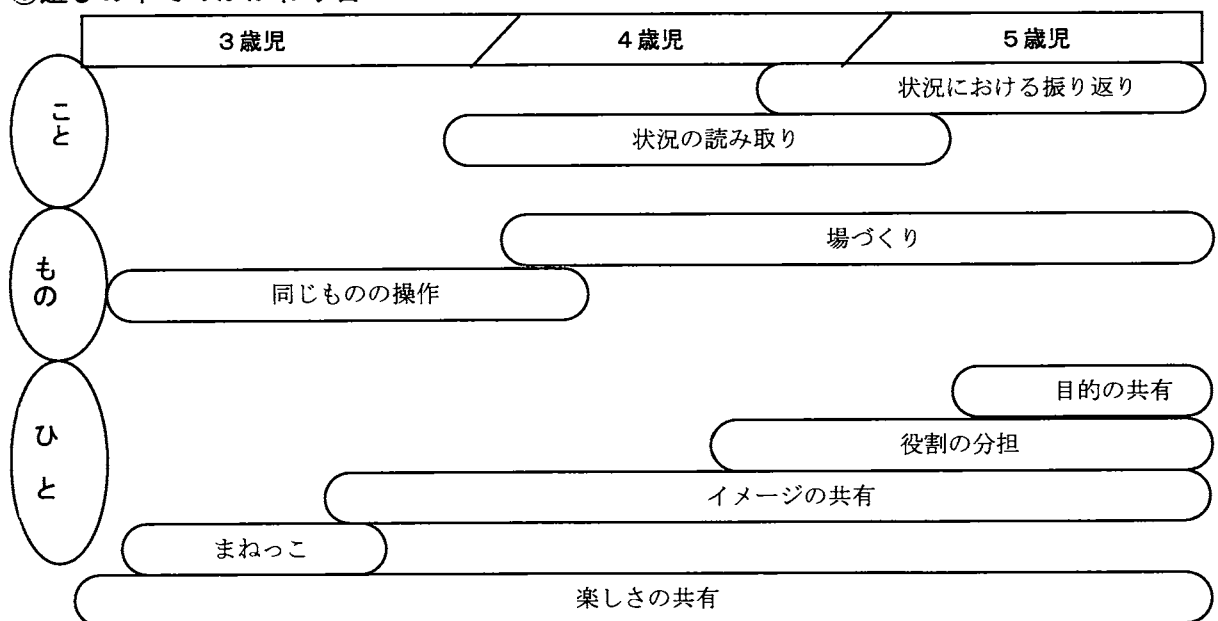
- (1) 友達とかかわり合っている姿の事例を収集する。
 - ・エピソードを綴る。
 - ・ビデオカンファレンスをする。
- (2) かかわり合いを関係図で表す。
- (3) 事例を①「幼児らのかかわり合い」、②「幼児らのかかわり合いを促す環境の構成」、③「幼児らのかかわり合いを促す教師の援助」の視点から考察する。

5. 実践事例

- ・ 3歳児『リボンとったら、どうする?』5月下旬
「言葉のまねっこ」が幼児ら共通の楽しさを促した事例
『わたしも使いたい』6月中旬 (VTR)
「もの」をめぐってのいざこぎを通して、友達と楽しく遊べるようになった事例
- ・ 4歳児『坂道にしたいんだ。でも、だめなんだ』10月中旬
育ちが異なる幼児らが、かかわり合いながら遊びの場をつくっていく事例
- ・ 5歳児『…おれも弱いところある』11月下旬
友達とのいざこぎを通して、自分の内面を省みることになった事例

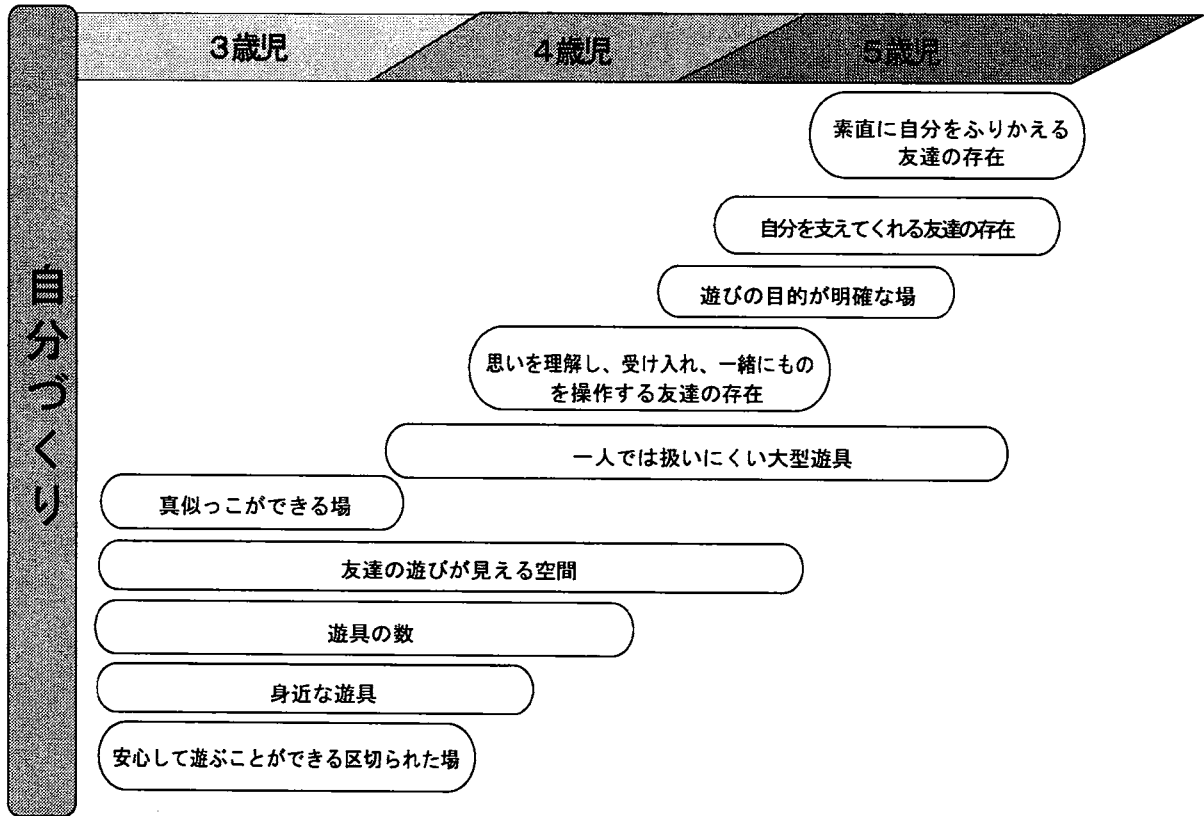
6. 研究のまとめ

①遊びの中でのかかわり合い



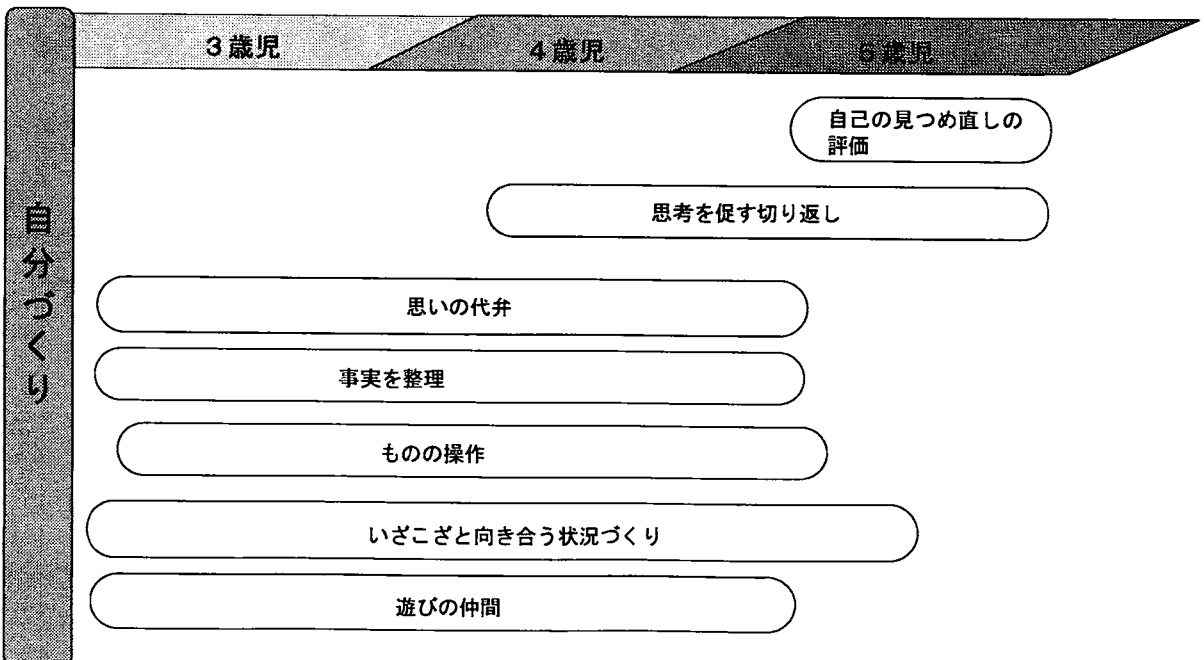
私達は「遊びの中でのかかわり合い」を見つめながら、事例を持ち寄って話し合いを積み重ねている。これまでの研究から以下のようなことが見えてきた。

② 幼児らのかかわり合いを促す環境の構成



3歳児では「まねっこができる場の保障」や「気の合うもの同士で安心して遊べる区切られたコーナー」が、4歳児では「一人では操作できない大型遊具」、「自由に組み合わせることができる遊具」などの「もの」が幼児らのかかわり合いを促すことがわかってきた。さらに、5歳児では人間関係の深まりに伴い、自分の思いを伝え合うには「友達の存在」が環境として大切であることが見えてきた。

③ 幼児らのかかわり合いを促す教師の援助



自分の思いはもっているが、なかなか表現しきれない幼児にとって、他の幼児らとつなぐために教師が「思いの代弁」をすることがとても大切である。いざこざが生じた場合には、友達の思いを知って自分を省みる機会と捉え、「いざこざに向き合う状況づくり」をしたり、時には「第三者を巻き込み」ながら客観的な友達の思いにふれさせたりする援助が必要となってくる。



さらに、自己の変容が見られた場合にはそのことについて評価し、幼児に自分を省みる大切さに気づかせていくことが大切だと考える。

